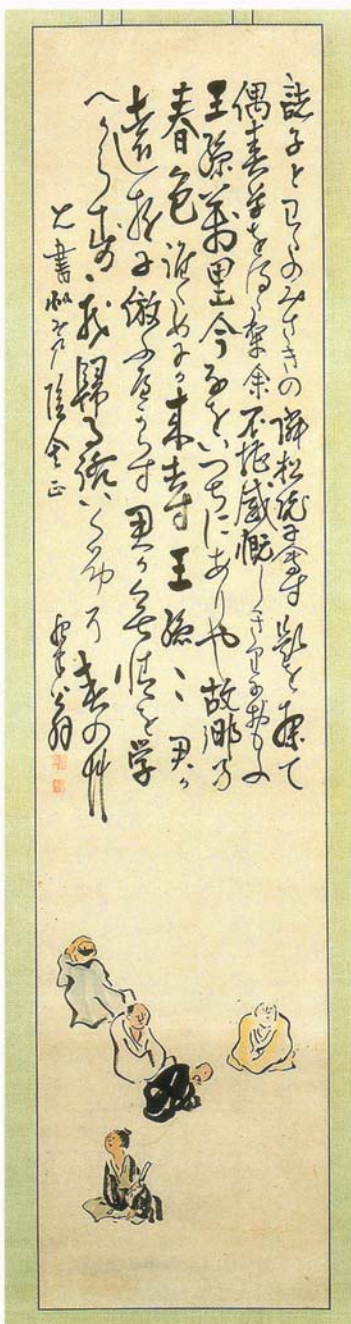


# やまとの名品

天理図書館



和わ田だ岬みさき遊ゆう記き  
 (与謝蕪村自画賛)

安永七年(一七七八)写 一幅  
 縦一二七・五センチ 横二九センチ

与謝蕪村おせんという人と、一般的には俳人のイメージが強いと思います。けれども、実は画業で生計を立て、名声も得ており、本人も俳諧は余技としていました。安永七年（一七七八）三月、京都に住む蕪村は、淀川を下り、大坂を経由して兵庫（神戸）へおもむきます。旅の主な目的は、愛弟子まなでしを見舞うためです。蕪村をして「我が門の囊錐のうすい」（抜きん出て才能がある）と賞賛された大魯たいろは、門下中で一、二を争う逸材でした。阿波徳島の藩士だった彼は、士分を捨てて故郷を出、上京の後蕪村に師事。やがて大坂で俳諧宗匠そうじょうの生活をはじめます。しかし、直情

径行で頑固な性格からか、知友とも絶交し、京都につづき大坂からも追われ、兵庫へ妻子とともに転居することになりました。大魯の才を認める蕪村は、彼の再起を願い、当地和田岬りんの隣松院しょういんで句会をもうけて、次のように詠よみました。

我わが帰かへる 路みちいく筋ぞ 春の岬さき

前書きによれば、「春草」の題を引き当てた蕪村は、漢詩の素養から、流浪したきり帰郷しない者を想起しました。句意は、いざ郷里へ帰ろうとしたが、帰路は幾筋いくにも分かれ、春の草が生い茂さかっていて、どの道を選べ



ばよいものか、途方に暮れるばかりだ、というもの。古里を出て、さまざま弟子に自分を重ねたのかもしれない。蕪村自身、淀川べりにある生地毛馬けま（大阪市）には、生涯に一度も帰らなかったのですから。

大魯は、この年の十一月に病没びつしますが、失意の中での句会くわいは、おそらくとても楽しい思い出となったことでしょう。

（天理図書館 三村 勤）

天理図書館のお知らせ Tel: 0743 - 63 - 9200 <http://www.tcl.gr.jp/>

◆天理ギャラリー第146回展「近世の文人たち－自筆資料にみるその人となり－」日時：5月13日(日)～6月10日(日) 9:30～17:30

※今回紹介の「和田岬遊記」も出展します。

◆平日(午前9時～午後5時半) 土・日・祝(午前9時～午後4時半)  
5月3日～5日、31日は休館。